

日付:2016年7月10日／聖書:サムエル記下11:1~17、26~27

説教:「殺してはならない、姦淫してはならない」

今朝の箇所は、これまでのダビデとはまるで違う、ダビデの弱さ、醜さ、不信仰を見る。これまで少年ダビデとゴリアテの戦いは、ダビデの勇気と神への信頼を魅せ付けられた。油注がれた者として謙虚に王としての歩みをしてきたはずだが、ここに来て“権力”におぼれる一人の人間を聖書は記す。王として権力をもって一人の女性を自分のものにしていく。邪魔になる者は夫であろうと、忠実な僕であろうと殺す。ダビデは、「神の箱」を迎え入れその中に納められている十戒の「殺してはならない、姦淫してはならない」という言葉を知っているにもかかわらずに罪を犯してしまう。“権力”というものが、いかに人間をおろかにし、神と人との距離を遠ざけてしまいやすいものか……。

ただ私たちは、このダビデを糾弾することが出来るのか？フランスのモラリストのラ・ロシュフコーは、「我々が、いろいろな情念に負けないのは、たまたまそれらが弱いからであって、我々が強いからではない」と言う。“強い”と思うところにまた、罪が忍び込み、人間のもろさが出て来るのである。聖書は、ダビデの栄光物語として書き上げることはしない。

もう一つ。沖縄は、日米両政府の権力において十戒の「殺してはならない、姦淫してはならない」という聖書の言葉、神の言葉が守られていない。「戦後 71 年」を迎える今日において今なお戦闘機の爆音に、墜落事故の恐怖に、化学兵器の汚染に、兵士による暴力などに、おびえ、犯され続ける。日本全土のわずか 0,6%にしか満たない小さな沖縄に、在日米軍基地の 74%が沖縄にあり続けている。その事ゆえに米軍がらみの事件事故が後を絶たないということは、言うまでもないこと。教会は、先日起きた二十歳女性への強姦、殺害遺棄事件を受けて、抗議文を作成した。(別紙参照)

この抗議文は、小さな抵抗に過ぎないが、しかし意思表示をしていく事は大事な事。サムエル記下 11 章 27 節の最後に、《ダビデのしたことは主の御心に適わなかった》とある。主の御心に適わないことを言い表して行くことは、教会の使命である。教会が権力におもねるようでは、教会ではない。教会が力あるものに気に入るように振る舞うようでは主の教会でない。教会が勇気を出して神の言葉に立つのでなければ、教会とはされない。小さな働きでもいい、私たちに出来る業を担わせて頂きたい。(神谷)